講談社選書メチエ

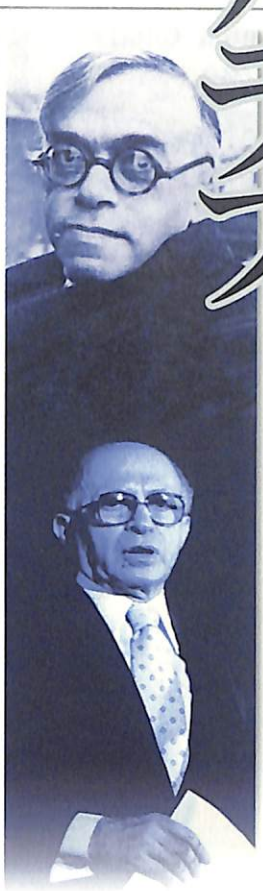
KODANSHA SENSHO MÉTIER

418

森 まり子

シオニズムとアラブ

ジャボティンスキーとイスラエル右派 一八八〇～二〇〇五年



［本書の内容］

●多民族国家における模索（一八八〇～一九一七年）
●民族国家と「鉄の壁」（一九一七～一九四〇年）
●ジャボティンスキーからメナヘム・ベギンへ（一九三〇年代～一九八一年）
●甦る「鉄の壁」（一九八二～二〇〇五年）

カバー図版
ジャボティンスキー（Heritage Image／PPS）より
ベギン（Sidney Harris／Heritage Image/PPS）
図版制作――山岸義明

講談社選書メチエのホームページ
http://shop.kodansha.jp/bc/books/metier/
上記ホームページにて、本シリーズに関する
より詳しい情報を提供しております。

マーク　世界樹

316.88
MO

シオニズムとアラブ

ジャボティンスキーとイスラエル右派 一八八〇～二〇〇五年

森 まり子

講談社選書メチエ
KODANSHA SENSHO MÉTIER
418

102250125

シオニズムとアラブ——ジャボティンスキーとイスラエル右派　一八八〇～二〇〇五年

凡例 7

序論 8

第1章 多民族国家における模索（一八八〇～一九一七年）
——修正主義シオニズムの濫觴——

第1節 ロシア帝国におけるジャボティンスキー 16
1. 民族への覚醒 16
2. 階級と民族のはざまで 23

第2節 オーストリア＝ハンガリー帝国の民族問題とジャボティンスキー 28
1. 民族、人種、領土 29
2. オーストリア社会主義の民族理論 35
3. ジャボティンスキーの自治構想 38

第3節 オスマン帝国の民族問題とジャボティンスキー 40
1. 青年トルコ革命と民族問題 42
2. ミッレト制と多民族帝国の黄昏 47
3. ジャボティンスキーのオスマン帝国観とアルメニア問題 52

第4節 ジャボティンスキーとボロホフ 57

第2章 民族国家と「鉄の壁」（一九一七～一九四〇年）
——ジャボティンスキーと修正主義運動の世界観——

第1節 修正主義運動の誕生 64

第2節 ジャボティンスキーの民族観と国家観 68
1. ユダヤ人国家と入植体制 68
2. 力への賛美——軍事力と文化—— 74
3. 民族と国家をめぐる一元論 75
4. 「シャアトネズ」と社会主義シオニズムへの批判 79
5. 国家像と社会像 85
6. 文化的遺産としてのユダヤ教 92

第3節 ジャボティンスキーのアラブ観とイスラーム観 94
1. 「鉄の壁」 94
2. 「鉄の壁」の背景 99
3. 「鉄の壁」の先見性と意義 102
4. 汎アラブ主義と汎イスラーム主義の否定 106

5. ジャボティンスキーの行動に見るアラブ観 110
6. アラブ人自治構想 113
7. アラブ人住民移送問題とジャボティンスキー 119
8. 移送論と自治論——シオニズムと民主主義の相克—— 121
9. 移送論の広がりと背景 123
第4節 アラブ人から見たジャボティンスキー 128

第3章 ジャボティンスキーからメナヘム・ベギンへ（一九三〇年代～一九八一年）
——修正主義運動の転換と継承——
第1節 修正主義運動の分裂とリクードへの道 139
1. 修正主義運動の分裂 139
2. 地下軍事組織から政治運動へ 142
3. 右派の擡頭と〈イスラエル国家ナショナリズム〉 143
第2節 ブリット・ハビリョニームの「逸脱」 147
1. アッバ・アヒメイル 148
2. ウリ・ツヴィ・グリンベルク 151
第3節 イルグンとレヒの世界観とアラブ観 154
1. イルグンの世界観 155
2. レヒの世界観 156
①アヴラハム・シュテルン 157
②イスラエル・エルダド 160
3. イルグンとレヒのアラブ観 161
第4節 「後継者」ベギンと軍事的シオニズム 165
1. ベギンの経歴 165
2. 軍事的シオニズムと「反乱」 168
3. ベギンの民族観、国家観、アラブ観 172
4. パレスチナ人自治構想 177
第5節 連続と断絶 180

第4章 甦る「鉄の壁」（一九八二～二〇〇五年）
——ジャボティンスキーの遺産と現代イスラエル政治——
第1節 レバノン戦争と極右の擡頭 189
1. 「ジャボティンスキー的幻想」としてのレバノン戦争 189
2. 極右の擡頭 191

第2節　シャミルとレヒの復権　193
1. シャミルの経歴　193
2. シャミルとリクード　197
3. 極右の圧力とプラグマティズムのはざまで　199
4. 硬直的な対アラブ政策　202
5. リクード内の論争　205
第3節　ネタニヤフと大イスラエル主義　208
1. ネタニヤフの経歴　208
2. ネタニヤフの歴史観とアラブ観　210
3. 安全保障と人口学的脅威をめぐって　216
4. 大イスラエル主義と和平交渉の相克　221
第4節　シャロンと「鉄の壁」　223
1. 入植村ではぐくまれたアラブ観　224
2. 労働陣営からリクード陣営へ　228
3. シャロンと「アラブ人問題」　230
4. 分離壁——大イスラエル主義とユダヤ性保持のはざまで——　232
結論　239
あとがき　245
註　248
用語解説　261

凡例

(1) 固有名詞の表記はできる限り原音に近く表記したが、地名や人名の中には慣例に従ったものもある。

(2) ヘブライ語やアラビア語のラテン文字による転写は極力省略し、片仮名書きで分かりやすく表記した。転写が付してある部分については『岩波イスラーム辞典』（二〇〇二年）の転写法に準拠した。アラビア語人名の日本語表記も同辞典の方式に準拠した。

(3) ヘブライ語の用語の意味を（　）で付する際には「ヘブライ語で」という断り書きを省略し、「　」の中に意味を記した。アラビア語など他言語の用語である場合には「～語で」と断り書きを付した。

〈例〉ヒッバト・ツィオン（「シオンの愛」）
イスティクラール（アラビア語で「独立」）

(4) 本文中に＊を付してあるヘブライ語などの専門用語については、巻末の「用語解説」も適宜参照されたい。

(5) 引用文中の［　］は引用者の付した註もしくは補足である。引用文中の傍点はすべて原著者のものである。

(6) 翻訳書からの引用の際には、漢字・平仮名の選択、読点の位置、誤った日本語など、原文の内容を損なう恐れのない技術的な点についてのみ多少の改変を加えた場合がある。

序論

イスラエルの右派政党リクード*のアリエル・シャロン*首相（当時）が、ヨルダン川西岸にパレスチナ人自爆テロリストの侵入を防ぐ分離壁を建設したことは記憶に新しい。全長約六七〇キロメートルに及ぶことが計画されているこの分離壁は、西岸深くくい込んでパレスチナ人の日常生活を麻痺させ、国際的な非難を浴びてきた。

この分離壁はシャロン個人の政策という側面を超えて、イスラエルの右派のアラブ問題に対するイデオロギー的立場を象徴的に示していた。約八〇年前、シオニズム右派の修正主義シオニズム*（以下「修正主義」）運動の創始者ウラジーミル・ゼエヴ・ジャボティンスキー（一八八〇～一九四〇年）は「鉄の壁」と題する論文（一九二三年）の中で、パレスチナのアラブ人のシオニズムへの反対を粉砕するには彼らが破壊できないような「鉄の壁」、つまりユダヤ人軍事力を打ち立てねばならないと説いていたからである。この議論は当時のシオニズム運動全体に大きな影響を与え、一九二五年に始まる修正主義運動の理論的基盤となった。つまりシャロンはリクードの鼻祖とも言えるジャボティンスキーの八〇年前の理論を、パレスチナ人の抵抗の新たな激化の中で物理的に可視化したことになる。それは分離と対決によってアラブ人の抵抗を粉砕するという右派の基本的立場の、挑発的な再表明とも受け取れるものであった。

シオニズムとアラブ――分離壁は正に本書のこのテーマにかかわっている。一九世紀末にユダヤ民族運動として組織化されたシオニズム運動は、ユダヤ人がユダヤ教の聖地である「シオンの丘」へ帰還して民族的郷土としてのエレツ・イスラエル*（「イスラエルの地」、パレスチナに該当）を取り戻すことをめざした。しかしオスマン帝国領であったパレスチナには後に「パレスチナ人」として知られるようになるアラブ人が多数居住していた。アラブ人が多数派を占めるパレスチナでユダヤ人多数派をつくり出そうとするシオニズム運動には、ユダヤ人が購入した土地からアラブ人を追放し、敵意を持って襲撃してくるアラブ人に対して自衛し、報復し、分離するという過程が当初から伴った。ユダヤ人入植地と周囲のアラブ人との激しい紛争は、入植が本格化した一八八〇年代から既に顕在化している[1]。今日なお混迷を極めているパレスチナ問題の淵源は、バルフォア宣言（一九一七年）やイスラエル建国（一九四八年）にではなく、本書の主人公であるジャボティンスキーが生まれた一八八〇年代にまで遡るのである。

しかしシオニズム運動と言ってもアラブ人に対して強硬一辺倒であったわけではなく、一時的にではあれ彼らとの共存をめざしたシオニストも存在したことを指摘しておかねばならない。先に述べたシオニズム右派の修正主義運動がアラブ人との分離と対決を唱える運動として一九二〇年代半ばに登場したのに対し、シオニズム左派の労働シオニズム運動*（以下「労働運動」）は、シオニズムに基づくアラブ人との分離を追求する一方、社会主義的理念によるアラブ人との共存を一九二〇年代に模索し、イギリス委任統治下のパレスチナで修正主義運動と激しく衝突した。後に修正主義運動がリクードに、労働運動の主流派がイスラエル労働党に発展することになるのだが、これら二つの運動が生まれた背景にあるシオニズムの二大潮流、政治的シオニズム*と実践的シオニズム*にここで触れておかねばならない。

近代シオニズム運動は、フランスのドレフュス事件に衝撃を受けてユダヤ人国家樹立の必要性を痛

感したハンガリー出身のユダヤ人、テオドール・ヘルツル*が一八九七年に開催した第一回シオニスト会議において本格的に組織化されるに至った。この会議では「公法によって保証された」ユダヤ人の民族的郷土の確保をうたうバーゼル綱領が採択されている。「公法によって保証される」こと、つまり列強の政治的保証を重視するヘルツルとバーゼル綱領の方向性は、シオニズムの中でも特に「政治的シオニズム」と呼ばれる。列強の政治的保証は当時オスマン帝国領であったパレスチナへの入植を行う際に不可欠であった。

「政治的シオニズム」とは、ヘルツルの出現に先立ってロシア帝国で勢力を誇っていた「実践的シオニズム」を意識してつけられた呼称である[2]。シオニズム運動の揺籃の地とも言うべきロシア帝国では、ポグロムと呼ばれる集団襲撃によってユダヤ人が迫害される中で、一八八〇年代初頭にヒッバト・ツィオン*（「シオンの愛」）という初期シオニズム組織がつくられ、パレスチナに初の組織的なユダヤ人移民を送り出した。パレスチナへのユダヤ人移住は「アリヤー*」（「上昇」）と呼ばれ、一八八〇年代の第一次アリヤー（一八八二～一九〇三年）を皮切りに、第二次（一九〇四～一九一四年）、第三次（一九一八～一九二三年）、第四次（一九二四～一九二八年）、第五次（一九二九～一九三六年）、第六次（一九三六～一九三九年）と続き、イスラエル国民社会の原型となるイシューヴ*（「定住地」、パレスチナのユダヤ人社会を指す）を形成していく。第一次移民は入植という実践的行為によってパレスチナの土地を獲得することをめざしたが、このような「実践的シオニズム」の方向性は、初代首相ダヴィド・ベングリオン*や、第二代大統領イツハク・ベンツヴィなど後のイスラエル指導者を輩出した第二次移民に受け継がれた。ロシア・東欧出身の第二次移民は、第一次ロシア革命前後にベール・ボロホフ*によって理論化された社会主義シオニズム*を奉じてパレスチナに来住し、実際に土地を耕すなどの

肉体労働によってパレスチナの地との有機的な結び付きを獲得しようとする労働運動（前出）を展開して、一九三〇年に成立したマパイ*（「エレツ・イスラエル労働者党」の頭文字を取った略称、一九六八年からイスラエル労働党）を中心にイシューヴ建設と建国の主導的勢力となる。この過程において労働運動が体現した実践的シオニズムは、ヘルツルの政治的シオニズムとせめぎ合いつつそれを補完する重要な役割を担うのである。

実践的シオニズムを体現するシオニズム左派の労働運動は、イギリス委任統治下のイシューヴでも支配的であり続けたが、この状況に異議を唱えたのがシオニズム右派の修正主義運動であった。ジャボティンスキー*が一九二五年に創始したこの運動は、パレスチナにおける入植という実践的活動を重視する労働運動を批判して政治的シオニズムへの回帰を唱え、入植という実践的行為よりも、ヘルツルが重視した列強の政治的保証の獲得が先決であると主張した。「修正主義」という名称はシオニズム自体を修正するのではなく、ヘルツル的な政治的シオニズムから「逸脱」したとされる実践的シオニズム（労働運動がそれを体現する）を「修正」する、という立場を意味している。修正主義運動は、労働運動の奉じる社会主義シオニズム、つまりシオニズムと社会主義の総合は、シオニズムの究極の目標である「ユダヤ人国家」の至上性を曖昧にするとして、ヨルダン川両岸におけるユダヤ人国家の実現を最優先させることを求め、エレツ・イスラエルを分割するいかなる領土的妥協も拒否した。更にシオニズムの最終目標の宣言に関して、労働運動が政治的見地から慎重な態度をとったのに対し、修正主義運動はそれを直ちに行うことを要求した。

今日から見て、また本書における我々の関心から見て最も重要な修正主義運動の特徴は、パレスチナをめぐるユダヤ人とアラブ人の対立は不可避であるとして両者の分離とアラブ問題の力による解決

アラブ・イスラエル紛争をめぐるイスラエル穏健派外交の軌跡1929―1956（講談社KAIHO）などがある。

を説いた点にある。その主張はアラブ問題に慎重に対応しようとしたシオニスト指導部や、社会主義的立場から解決を試みた一九二〇年代の労働運動にとって重大な挑戦となり、ユダヤ人世論にも大きなインパクトを与えた。修正主義運動は一九二〇年代末から一九三〇年代初頭にかけてシオニスト指導部の対英・対アラブ路線に不満を持つパレスチナのユダヤ人や、反ユダヤ主義に苦しむ東欧のユダヤ人の間に勢力を伸ばすが、一九三〇年代に分裂して地下軍事組織を生み出し、世界シオニズム運動における覇権争いで労働運動に敗北して組織的に衰退していく。

しかしジャボティンスキーの思想自体は、マパイが政権を担った建国後のイスラエル政治においても命脈を保ち続け、右派の政治家や活動家にとって程度の差こそあれ正統性の源泉であり続けてきた。中でも彼の「後継者」を自任していたのが、一九七八年のキャンプ＝デーヴィド合意を達成してノーベル平和賞を受賞したメナヘム・ベギン*元首相である。ジャボティンスキーを師と仰いだ彼は、イスラエル建国以前は修正主義運動の地下軍事組織の司令官であった。一九四〇年のジャボティンスキーの死後、ベギンは公式には一貫して彼を讃えて「後継者」としての地位を築き、建国と同時に右派政党ヘルート*（「自由」）を創始する。ヘルートが中核となって他の諸政党と合同した結果、一九七三年に成立したのがリクード（「統一」）である。一九七七年選挙でベギン率いるこのリクードは、建国後一貫して与党であった労働党を破って初めて政権を獲得し、ここに至ってジャボティンスキーの修正主義はイスラエル政治の表舞台に力強く再生することになった。ベギンの後のリクードの首相イツハク・シャミル*やベニヤミン・ネタニヤフ*や分離壁を建設したシャロン、また極右の主要な集団も思想的系譜をたどればジャボティンスキーに行き着く。つまりジャボティンスキーの思想は、リクードをはじめとするイスラエルの右派全体の思想的源流として位置づけられるのである。しかもその思

想は、建国後のパレスチナ問題の混迷とアラブ・イスラエル紛争の激化の中で左派の労働党の中にも支持者を見出し、一九七七年以前の労働党政権時代においてさえその静かな浸透力によってイスラエルの対アラブ政策に少なからぬ影響を及ぼしていた。これらの意味でジャボティンスキーの修正主義は、イスラエルの対アラブ政策、特に対アラブ強硬論を分析する上で欠かせない要因なのである。

本書は分離壁に象徴されるイスラエル右派の重い存在感を意識しながら、修正主義の理論的基礎を築いたジャボティンスキーの思想を彼のアラブ問題に対する考え方に焦点を当てて明らかにし、その思想的遺産が後のリクードにいかに継承されたのかを検討することによって、シオニズムにおける「対アラブ強硬論」の系譜の一端に光を当てようとするものである。ジャボティンスキーの思想から見るシオニズムとアラブの関係は、パレスチナ問題の根源と、その問題の帰趨を左右してきたイスラエルの内政構造をも照射するはずである。ジャボティンスキーの修正主義を分析するにあたっては、それの右派理論としての特殊性と左右を横断する普遍性の両面を浮き彫りにするため、シオニズム左派の労働運動との関係や比較にも大きな関心を払うことになるだろう。

イスラエルでジャボティンスキーと右派に関する本格的な研究が出たのは一九八〇年代後半になってからであった。労働党政権時代（一九四八～一九七七年）には右派の歴史は無視され、研究対象とならなかったためである。このような事情から客観的で良質な研究の蓄積が必ずしも充分ではない状況下で、一八八〇～二〇〇五年という時代的範囲をとって、しかもヨーロッパと中東を横断するジャボティンスキーの足跡とシオニズムの広域性に留意しながら本書のテーマを扱おうとするのは無謀な挑戦かも知れない。しかしすべてを論じきれないことを承知の上で敢えてそれを選んだのは、ジャボティンスキーの思想の時代を超える生命力と、ロシア・東欧をも含む広域的な影響力の故であると共

に、一八八〇～二〇〇五年という一世紀余がパレスチナ問題そのものの歴史と正に重なり合っているからだ。長い時間的枠組みと、パレスチナという狭い地域を超えて中東とヨーロッパの両方を射程に収める地域横断的な視野こそがこの紛争の根源と全貌の把握に必要であることを、私は長年の研究で痛感してきた。時代的・地域的に細分化されがちな現代の歴史研究の中で、本書は「試論」的性格を持つとも言えよう。しかし、その中で粗削りながらも浮かび上がる特異な思想家の民族論と「対アラブ強硬論」の系譜が、今日なお解決の展望が見えないパレスチナ問題の核心と本質を新たに照らし出し、この紛争の未来を考えるよすがとなることを切に願っている。

第1章
多民族国家における模索（一八八〇～一九一七年）
――修正主義シオニズムの濫觴――

する絶望的な抵抗と憎悪であった。ジャボティンスキーのヴィジョンを可視的に象徴するその壁がベングリオンの愛弟子の一人シャロンによって建設された事実は、シオニズムの左右の潮流が、歴史的な対立や相克を封印しつつ、イスラエル国家の対アラブ・ナショナリズムという決定的な断面においてジャボティンスキーの遺産を共有してきた構図を改めて浮かび上がらせるのである。

結論

一九六七年戦争はソ連（当時）のユダヤ人にとって大きな転機であった。大イスラエル主義の勃興をもたらしたイスラエルの勝利は、ソ連のユダヤ人の間にも民族意識を覚醒させてイスラエルへの移住の波を引き起こす。移住先でリクードを支持した彼らは、実は移住前からジャボティンスキーと修正主義に深いかかわりを持っていた。かつて修正主義の牙城であったラトヴィアのリガでは、一九六〇年代初頭にサミズダート（地下出版）でジャボティンスキーの著作の幾つかが出回り、ここから彼の著作がソ連各地の多数のユダヤ人活動家の手に渡ったのである。しかも第二次大戦中に中央アジアに逃れたりグラーグ（強制労働収容所）に収容されたりして戦争を生き延びたものの、その後イスラエルに移住できずにソ連にとどまった数多くのベタルのメンバーがソ連のユダヤ人の新しい世代の教育に携わることになったため、比較的若い移民予備軍の中にはジャボティンスキーと古典的修正主義の信奉者が少なからず存在した[1]。イスラエル占領地への入植者として後のインティファーダとも無縁ではないソ連系移民の背後には、急進的なユダヤ人ナショナリズムとしてソ連で再生したジャボティンスキーの思想の生命力があったのである。

その生命力の秘密は、ジャボティンスキーが民族国家を求める人々の強い衝動に本質的な部分で応えたことにあったと言えよう。彼は第一次大戦前のヨーロッパで民族問題を見聞しながら、アナトリアから東欧・中欧にかけて「法的制度としての国家から民族的制度としての国家への変質」[2]が広域的に進行しているのを感じとっていた。「民族国家」としての内実を露呈したヨーロッパの「国民国

著書に『社会主義シオニズムとアラブ問題』（岩波書店）、論文に「モシェー・シャレット――パレスチナ問題とアラブ人」（『[illegible]』）、「[illegible]」（『[illegible]』）などがある。

家」から我々は排除される運命にあり、たとえ同化しても、多数派と民族的起源を異にする我々がその成員として受け入れられることはない――ドレフュス事件後のヘルツルにも共有されたこの強い危機感こそ、第一次大戦後のジャボティンスキーをユダヤ人の民族国家に突き動かした原動力であった。反セム主義に苦しむ東欧のユダヤ人を救わねばならないという焦慮にも支えられた彼の、「ヨルダン川両岸におけるユダヤ人多数派」「アラブ問題の力による解決」というスローガンは、民族国家への衝動に応える単純明快さの故に大衆的な支持を得たのである。それは一九二〇年代に社会主義的理念によるアラブ人との共存と、シオニズムに基づくアラブ人との分離を同時に追求した労働運動の歯切れの悪さや、アラブ人との共生のためにはユダヤ人がパレスチナで少数派にとどまることさえ甘受しようとしたブリット・シャローム（「平和連盟」）[3]の孤立しがちな利他主義とは対照的であった。

しかしジャボティンスキーの民族論を詳細に検討すると、大衆向けのこれらのスローガンには収まりきらない穏健さや深みや陰影に彩られていたことに気付く。例えば対アラブ強硬論の代表とされる「鉄の壁」論文は、確かにアラブ人との分離・対決を強調しているにもかかわらず、アラブ人が穏健化すれば政治的交渉に応じ、彼らに市民的権利を保障することも想定している。また彼の民族論のもう一つの大きな柱は、市民的権利の保障と結び付けて議論されている文化的自治の概念である。それは彼の理論が、時に誤解されるような対決一辺倒のものではなく、ユダヤ人国家の枠組みさえ受け入れればアラブ人に文化的自治は認めるという「穏健さ」も持っていたことを示している。つまりシャロンの表現を借りれば、ジャボティンスキーはアラブ人の「この地に対する」権利（主権）は認めない代わりに、「この地における」権利（自治権や市民的権利）は保障しようとしたことになる。しかしこの自治論はリクード強硬派や極右に無視されがちであり、右派の中で正当な評価を受けてこなかったと言えよう。それは自治が右派の掲げるエレツ・イスラエルの不可分性の原則と衝突するからにほかならない。また強硬派は、「鉄の壁」論文の前半のアラブ人との分離と対決の部分のみを強調し、後半のアラブ人との政治的交渉と市民的権利の保障の部分には沈黙しがちであった。このようにジャボティンスキーの本来の民族論の中にはリクード強硬派や極右にとって明らかに「不都合な」要素も含まれていたのである。

ジャボティンスキーの民族論のこのような多面性は、彼の思想がディアスポラ（特に東欧）のユダヤ人の権利保障という問題意識とも密接に結び付いていたことと関係している。アラブ人に対する市民的権利や自治の保障も、本来は東欧のユダヤ人の市民的権利や自治の享受に関する構想の延長線上に構想されたものであった。つまり自分たちが東欧で保障されることを望む権利はユダヤ人国家のアラブ人少数派にも保障する、という一種の相互性が前提とされていたと考えればよいだろう。自治論など彼の民族論が持つ「穏健さ」はこのようなディアスポラとの相互性の文脈で理解できるのであり、パレスチナのみに限定された視野を持つ彼の「後継者たち」、特にリクード強硬派や極右にとっては理解不可能な煩わしい要素以外の何ものでもなかった。ベギンの「パレスチナ人自治計画」や、「シャミル計画」への彼らの反対は正にこの文脈で理解されよう。

しかしジャボティンスキーの自治論が真の意味で「穏健」なのかについては見方が分かれるところである。彼の構想した自治はあくまでも主権に代替する制度であり、アラブ人がユダヤ人多数派という現実を受け入れた場合にのみ、つまりアラブ人が少数派にとどまる場合にのみ付与されるものであった。しかも彼はパレスチナで多数派を占めるアラブ人を少数派に転落させる方策として「移送」を支持していたのである。自治がそれに先立つ移送を前提としていたとすれば、自治制度の持つ「穏健

さ」は相殺され、シオニズムへの従属という本質的な限界が大きく浮上してくる。ベギンからシャロンに至るまでのリクードの主要な政治家が自治自体には反対しなかったとしても、「主権につながる自治」に明確な拒否反応を見せてきた歴史もここで想起されよう。シオニズムの伝統における自治論は対アラブ強硬論の裏返しとしての複雑な性格も帯びているのである。

明治維新を見ることなく刑死した幕末の吉田松陰のように、ジャボティンスキーその人も悲願であったユダヤ人国家樹立を見ることはなかった。しかし松陰の思想が、死してなお維新の元勲の精神に生き続けたように、ジャボティンスキーが生前に蒔いた「種」は建国後のイスラエルで紆余曲折を経て右派政党リクードという形で結実する。その過程でジャボティンスキーの思想は多文化に開かれた豊かさや知的深みを失い、「不都合な」要素を切り捨てられ、大衆に訴えやすい核心部分だけが先鋭化されて対アラブ強硬論を形成していく。本書で見たように、極右の中心的な部分もレヒを通じて系譜的にはジャボティンスキーとつながっているのであり、多岐にわたる彼の思想の中の急進的な部分を宗教シオニズムと融合させながら暗殺やテロリズムを正当化するに至った集団として彼らを位置づけることができよう。シャミルやシャロンに見られるようにリクード強硬派はこの極右勢力と心情的に極めて近く、中東和平の帰趨を左右するファクターの一つとして今後も注視する必要があるだろう。

このように単純化されたジャボティンスキーの「対アラブ強硬論」が既に一九三〇年代から労働運動の指導者たちにも事実上共有され、建国後も右派の狭い枠組みを大胆に超えてベングリオンやダヤンなど左派の多くの共鳴者を見出しながら労働党の対アラブ政策に反映されてきたことは、イスラエル政治史において極めて示唆に富む。しかし逆に右派の中には「鉄の壁」路線を維持することに疑問を持った人々もいた。パレスチナ人に次第に理解を示すようになったエゼル・ワイツマンや、パレスチナ人との直接交渉をシャミルに説いたモシェー・アレンス（いずれもリクード）などである。更により積極的に「鉄の壁」を越えようとした人々の良心も存在した。パレスチナ問題の公正な解決とアラブ諸国との和解を志して半ばに終わったシャレットやラビンなどの労働党の政治家の軌跡や、二〇〇三年のジュネーヴ合意（イスラエルとパレスチナの和平合意の非公式草案）を生んだジュネーヴ・イニシャティヴに参加したイスラエル人とパレスチナ人の和解への意思、分離壁がもたらすパレスチナ人の人権侵害を告発し続けているイスラエルの人権団体の勇気などを忘れることはできない。また本書で触れたように、リクード政権の対アラブ強硬路線も現実には様々な修正と譲歩を余儀なくされてきたのであり、「対アラブ強硬論」は必ずしも不変に維持されてきたわけではない。

しかしそれにもかかわらず、「本能的なリベラリズムと寛容」[4]を備えていた思想家の本来の意図を超えて「対アラブ強硬論」として建国後に甦ったジャボティンスキーの思想は、これらの共存や妥協の選択肢と鋭く相克しながら、パレスチナ人のテロリズムが起きる度に硬化するイスラエル世論を背景として、同国の政治エリートや一般市民のアラブ観と対外政策のあり方に今なお根強い影響を与え続けているのである。国際社会はイスラエル側のこの現実を、パレスチナ問題を解決しようとする際の根本的な障害の一つとして冷静に見据える必要があるだろう。

更に知らせるまで我々は鉄の壁のある中東にいる。鉄の壁がすることは我々に時間を与えることである。この時代の過程で肯定的な内部変化がアラブ世界に起こり、我々がその防壁を低くしたり、恐らくはいつの日かそれを廃したりすることさえできるようになることを望むものである。こ

のプロセスは徐々に起きつつあるが、それを完成させるためには、我々は消え去らないだろうという覆しようのない理解を、我々はアラブ世界の中につくり出さねばならないのだ（ネタニヤフ、一九九六年）[5]。

……鉄の壁は来るべき世代にとって最も理にかなった政策である。……ジャボティンスキーが提案したことをベングリオンは採用した。……ベングリオンはアラブは力のみを理解し、究極的な力〔軍事力〕は我々のここでの存在を受け入れるよう彼らを説得する唯一の事柄だと論じたのである。彼は正しかった。……欧米と我々自身の良心のいずれにとっても我々が政治的解決に向けて努力することは重要である。しかし最終的には、我々を受け入れる彼らの心の準備を決定するのは力だけなのだ。彼らは我々を敗北させることはできないという認識だけなのだ（ベニー・モーリス、二〇〇四年）[6]。

現リクード党首と著名な歴史家の一人――イスラエルの指導的な立場にある彼らの言が凝縮する「鉄の壁」の呪縛を、アラブとの深い精神的断絶と共存への恐怖感を、イスラエルがラビン首相のかつて示したような大局観に富む政治的意思と覚悟によって、国民的合意の下に再び超えようとする「夜明け」は、遠いのであろうか。

あとがき

本書は、私が一九九四年三月に東京大学大学院に提出した修士論文「シオニズム修正主義における民族と国家――ウラジーミル・ジャボティンスキーの思想的軌跡を中心に――」に加筆・改変を施して世に問うものである。第一章第三節三「ジャボティンスキーのオスマン帝国観とアルメニア問題」、アラブ人住民移送論に関する第二章第三節八～九、第三章第三節三「イルグンとレヒのアラブ観」中の一九四八年に両組織がパレスチナ難民発生に果たした役割についての記述、及び第四章全体は、滞米中の研究をもとに今回新たに挿入した主要な部分である。第三章までで完結していた修士論文に第四章の現代イスラエル政治における右派の系譜（二〇〇五年まで）を付け加えた結果、本書は、もともとの論文にはなかったイスラエルの左右両派を横断するジャボティンスキーの遺産（対アラブ・ナショナリズム）についての洞察を通じてイスラエル政治の大構造にも光を当てることとなった。このようなテーマの広がりに合わせて序論と結論を全面的に書き改めたほか、研究の進展を反映させて細部もかなり書き換え、場合によっては削除ないし凝縮した表現に改めた。その結果、完成までに時間はかかったものの、本書は元の論文に比べるとはるかに今日性と普遍性を帯びることになったのではないかと考えている。なお以上のような経緯から、本書には、修士論文の準備段階で執筆した既刊論文「修正主義運動における民族観・国家観――ジャボティンスキーからメナヘム・ベギンへ――」（池田明史編『イスラエル国家の諸問題』所収、アジア経済研究所、一九九四年）と重複する部分が

あることをお断りしておきたい。

また今回は現代政治とのつながりを重視したため充分に紹介できなかったが、ジャボティンスキーの多岐にわたる著作（文学も含む）はロシア・東欧史と中東史をつなぐ多彩な視点を含んでいる。これらの著作の学術的分析は、イスラエルとヨーロッパでの一時的滞在などを経て将来的にまとめることを考えている。

本書とそのもとになった修士論文を完成させる過程では多くの方にお世話になった。年月を遡ることになるが、修士論文については東京大学の山内昌之先生、鈴木董先生、中井和夫先生に刺激溢れる批評を頂いた。特に山内先生は、今回の執筆に際して、二三歳の若さで書いた未熟な論文の刊行を当初ためらっていた私を励まされ、本書の題名についても貴重な助言を寄せられた。この場を借りて心より御礼申し上げたい。

そもそも本書執筆の契機は、滞米中に講談社の上田哲之氏から現代新書執筆のお誘いを頂いたことにあった。しかし私の書こうとしている内容とそのスタイルが純粋な一般書よりも学術書のそれに近いことを見抜かれた氏が、選書メチエに変更することを提案して下さったのがちょうど二年前、アメリカから帰国した直後のことである。学術論文のスタイルから抜けきれない著者に、氏が一般読者の視点から様々な提案をして下さったことは誠に幸いであった。本書が少しでも一般読者にとって読みやすいものになったとすれば、それは氏の的確な助言のお蔭である。また編集の最後の段階では、佐々木啓子氏が細やかで丁寧なお仕事によって本書を完成させて下さった。お二人に心から感謝したい。また、今は一一歳と三歳になった男の子を育てながらの執筆、未明まで書斎の灯が消えない研究の日々を支えてくれた夫への気持ちは、私的ながら本当に深いものである。

パレスチナ問題が立場の違う論者たちの絶対的に相容れない論争の的になりがちなアメリカの環境に身をおいて以来、この問題をできるだけ公平に見る必要性と共に、「日本人として和解のために何ができるか」という問いが切実に響くのを感じてきた。イスラエル建国とパレスチナ難民の発生からちょうど六〇年を経た今年、本書が、世界の主要な国際紛争の一つであるパレスチナ問題とその背景にあるイスラエルの対アラブ強硬論の理解にいくばくかでも寄与し、国際紛争の解決に日本人として貢献することを志す人々、特に若い世代の人々に広く読まれるなら、望外の喜びである。

二〇〇八年六月　東京にて

森まり子

(Introduction by Graham Usher). *The West Bank Wall: Unmaking Palestine*, London: Pluto Press, 2006, pp.12-14.

62 Dolphin (Introduction by Usher), *op.cit.*, pp.16-17.

63 *Ibid.*, pp.50-51, pp.59-61.

64 *Ibid.*, pp.51-52, p.62, p.205.

65 *Ibid.*, pp.61-62, p.58, p.168, pp.39-41.

66 *Ibid.*, pp.73-75, p.20, p.147. カルキルヤでは市民生活の麻痺がハマースやイスラーム・ジハード運動への支持の高まりにつながっているという。"politicide" について詳しくは、Baruch Kimmerling, *Politicide: Ariel Sharon's War against the Palestinians*, Verso, 2003 を参照。

結論

1 Colin Shindler, *The Land beyond Promise: Israel, Likud and the Zionist Dream*, London and New York: I.B.Tauris, 2002, pp.184-185.

2 ハンナ・アーレント著、大島通義・大島かおり訳『全体主義の起源2――帝国主義――』みすず書房、一九七二年、二四九ページ。

3 ブリット・シャロームは一九二五年にユダヤ人とアラブ人の和解をめざして創設された組織で、ユダヤ人とアラブ人が人口比にかかわりなく一つの国家を形成するという二民族国家案を提唱したが、シオニズムから逸脱しがちであったため大きな支持は得られず、一九三〇年代初頭に活動を停止した。

4 Abba Eban, *An Autobiography*, New York: Random House, 1977, p.13. エバンはジャボティンスキーを次のように評している。「その最大限主義的なスローガンにもかかわらず、彼は本能的なリベラリズムと寛容を備えていたが、それは彼の追随者の中のある人々が後年そのために知られるようになった毒のある悪意とはかなり不調和なものだった」。

5 Ari Shavit, "A New Middle East? What an Amusing Idea," Ha'aretz, 22 November 1996.

6 Ari Shavit, "Survival of the Fittest" (An Interview with Benny Morris), Ha'aretz Magazine, 9 January 2004.

用語解説

アハドゥト・ハアヴォダー：ヘブライ語で「労働の統一」。一九一九年にパレスチナ・ポアレイ・ツィオンと非加盟グループが合併して成立した社会主義シオニスト政党。一九三〇年にハポエル・ハツァイル（「若き労働者」党）と合併してマパイを結成。→ポアレイ・ツィオン、マパイ

アリヤー：ヘブライ語で「上昇」。パレスチナへのユダヤ人移住を指す。

イシューヴ：ヘブライ語で「定住地」若しくは「住民」。パレスチナのユダヤ人社会を指す。

イルグン（・ツヴァイ・レウミ）：ヘブライ語で「民族軍事組織」。一九三一年に創設された修正主義運動の地下軍事組織。一九四三年にベギンが司令官となり、イギリスとアラブ人に対するテロ活動を行う。一九四八年の建国時にベギンはイルグンを母体に右派政党ヘルートを創始し、これが後のリクードの組織的中核となった。→修正主義運動、ベギン、ヘルート、リクード

エレツ・イスラエル：ヘブライ語で「イスラエルの地」。

ガハル：ゲッシュ・ヘルート・リベラリーム（「ヘルート・自由党（合同）集団」）の頭文字をとった略称。一九六五年に結成。リクード成立の前段階となる。→リクード

ガルート：ヘブライ語で「ディアスポラ」。→ディアスポラ

グッシュ・エムニーム：ヘブライ語で「信徒の集団」。一九七四年に結成された宗教シオニストの入植推進団体。

実践的シオニズム：入植などの実践的行為を通じてパレスチナの地を獲得しようとするシオニズムの一潮流。ヘルツルの政治的シオニズムと対立しつつ、それを補完する役割を果たした。一九世紀末から二〇世紀初頭のロシア帝国で支配的であり、労働運動はこの流れを引く。→ヘルツル、政治的シオニズム、労働運動

シャアトネズ：ヘブライ語で「毛とリンネルを混ぜた衣服」のことであり、聖書で禁じられている。転じて「混合物」の意。

社会主義シオニズム：シオニズム左派の思想。労働シオニズムとも呼ばれる。革命期ロシアで社会主義とシオニズムを折衷しようとした組織ポアレイ・ツィオンがその中心的な担い手となり、同組織を一九〇六年に統一したボロホフがその理論的基礎を築いた。ボロホフは雇用の場としての領土を確保しない限り正常な階級闘争はあり得ないとし、ユダヤ人労働者が民族領土をパレスチナに求めることを正当化した。つまり社会主義の実現の不可欠な要素としてシオニズムを重視したのである。この思想はロシア・東欧系の第二次移民（一九〇四～一九一四年にパレスチナに来住）に影響を与え、彼らがパレスチナで展開した労働運動の、ひいては後の労働党などイスラエル左派の土台となった。→労働運動、ポアレイ・ツィオン、ボロホフ

シャミル、イツハク：一九一五～。リクードの政治家。イスラエル首相（一九八三～一九八四、一九八六～一九九二）。元レヒの指導者。→レヒ

シャレット（シェルトク）、モシェー：一八九四～一九六五。イスラエル初代外相、第二代首相（一九五三～一九五五）。建国前はユダヤ機関政治局長として対アラブ外交を担い、ベングリオンを補佐して建国に貢献。建国後はマパイ穏健派としてベングリオンらマパイ強硬派やベギンら右派に対抗し、対アラブ穏健政策を推進したが、一九五六年に強硬派の圧力により外相を辞任。→ベングリオン、マパイ、ベギン

シャロン、アリエル：一九二八～。イスラエルの軍人・政治家。国防相などを歴任した後、首相（二〇〇一～二〇〇六）。リクード最強硬派として知られたが、ガザ撤退を実施。

修正主義（シオニズム）運動：一九二五年にジャボティンスキーが創始したシオニズム右派の運動。労働運動の実践的シオニズムの路線を「修正」してヘルツルの政治的シオニズムに回帰することを唱えた。民族の至上性を掲げる立場から、労働運動のアラブ人との共存の試みを批判し、アラブ人との分離・対決を主張して、後のリクードなどイスラエル右派の源流となった。→労働運動、実践的シオニズム、ヘルツル、政治的シオニズム、リクード

ジュデア・サマリア：ヨルダン川西岸地方を指す呼称。聖書時代の民族的記憶に対する郷愁がこめられており、民族主義的なユダヤ人は「西岸」と言う代わりにこの呼称を用いる。

政治的シオニズム：大国の政治的保証を重視するシオニズムの一潮流。ヘルツルが一八九七年の第一回世界シオニスト会議で打ち出したもので、実践的シオニズムの潮流と対立しつつ相互に補完した。修正主義運動はこの流れを引く。→ヘルツル、実践的シオニズム、修正主義運動

ディアスポラ：「離散」の意。ユダヤ人がパレスチナ以外の各地に離散している状態を指す。

ネタニヤフ、ベニヤミン：一九四九～。リクードの政治家。イスラエル首相（一九九六～一九九九）。テロ問題の専門家としても知られる。現リクード党首。

ハガナー：ヘブライ語で「防衛」。一九二〇年に創設されたイシューヴの自衛組織。後のイスラエル国防軍の母体となる。→イシューヴ

ヒスタドルート：ヘブライ語で「組織」。一九二〇年に成立したイシューヴの総合的なユダヤ人労働者組織。「ユダヤ人労働総同盟」という正式の長い名称を略してヒスタドルートと呼ぶ。労働運動の下におかれ、移民の統合などに大きな役割を果たす。建国後もイスラエル労働総同盟として存続。→労働運動

ヒッバト・ツィオン：ヘブライ語で「シオンの愛」。一八八〇年代にロシアで創設された初期のシオニズム組織。

ピール委員会：正式名称は「王立委員会」。一九三六年に勃発したアラブ反乱を受けてパレスチナ問題の解決策を提言させるべくイギリス政府が任命した委員会。一九三七年七月八日に公表されたピール委員会報告は、パレスチナをユダヤ人国家とアラブ人国家に分割すると共に、ローザンヌ条約（一九二三年）後に行われたギリシア・トルコ住民交換に倣った両国の住民交換を提案しており、パレスチナにおける分断国家への動きに弾みをつけた。

ベギン、メナヘム：一九一三～一九九二。リクードの政治家。イスラエル首相（一九七七～一九八三）。元イルグン司令官で、ジャボティンスキーの後継者を自任した。一九四八年にイルグンを母体とした右派政党ヘルートを創設し、一九七三年に同党を中核とするリクードを創設した。→リクード、イルグン、ヘルート

ベタル：ブリット・トルンペルドール（「トルンペルドール連盟」）の略称。修正主義運動の青年組織。→修正主義運動

ヘルツル、テオドール：一八六〇～一九〇四。近代シオニズム運動の父。一八九六年に著書『ユダヤ人国家』を刊行。一八九七年にバーゼルで第一回世界シオニスト会議を開いて世界シオニスト機構を設立し、政治的シオニズムを推し進めた。→政治的シオニズム

ヘルート：ヘブライ語で「自由」。一九四八年のイスラエル建国時にイルグンを母体としてベギンが創設した右派政党。一九七三年に自由党その他と合併してリクードが成立する。→イルグン、ベギン、リクード

ベングリオン、ダヴィド：一八八六～一九七三。イスラエル初代首相（一九四八～一九五三、一九五五～一九六三）。ロシア領ポーランド生まれ。一九〇六年にパレスチナに移住して労働運動の指導者となり、一九三〇年からマパイの指導者、一九三五年からユダヤ機関執行部議長を務めて、ワイツマンと並ぶシオニズム運動全体の指導者としてイスラエル建国を導いた。強硬派の領袖として周辺アラブ諸国との軍事的緊張を高める政策をとりつつ政界に君臨するが、一九六五年に新党ラフィを結成してマパイから離脱。一九六八年にラフィ党員の多くがイスラエル労働党に合流した際も「国家リスト」として党外にとどまり、労働党に復帰することはなかった。→労働（シオニズム）運動、マパイ、ワイツマン、ラフィ

ポアレイ・ツィオン：ヘブライ語で「シオンの労働者」。一八九七年にミンスクで興った同名のグループを端緒としてロシア帝国内のユダヤ人強制集住地域に広がったシオニスト左派組織の総称。一九〇六年にボロホフの指導下に統一される。同年にベングリオンら第二次移民が創設したパレスチナ・ポアレイ・ツィオンは、一九一九年に非加盟グループと合併してアハドゥト・ハアヴォダーを結成。→ボロホフ、ベングリオン、アハドゥト・ハアヴォダー

ボロホフ、ベール：一八八一～一九一七。ポルタヴァ生まれ。一九〇六年にポアレイ・ツィオンを統一した社会主義シオニズムの理論家。→ポアレイ・ツィオン、社会主義シオニズム

マパイ：ミフレゲト・ポアレイ・エレツ・イスラエル（「エレツ・イスラエル労働者党」）の頭文字をとった略称。労働運動の中心的政党として一九三〇年に創設され、修正主義運動を抑えてベングリオンの下にイスラエル建国の主導的勢力となる。一九〇四年からパレスチナに来住した第二次移民が創設したパレスチナ・ポアレイ・ツィオンと非加盟グループが一九一九年に合併してアハドゥト・ハアヴォダー（「労働の統一」党）が成立、これが一九三〇年にもう一つの労働者政党ハポエル・ハツァイル（「若き労働者」党）と合併して結成されたのがマパイ（一九六八年からイスラエル労働党）であり、建国以来一九七七年まで一貫して与党であった。→労働運動、ベングリオン、ポアレイ・ツィオン、アハドゥト・ハアヴォダー

ミッレト制：オスマン帝国において宗教共同体の自治を保障した制度。ミッレトの語は、宗教や宗教共同体を意味するアラビア語であるミッラ（milla）に由来する。

ラフィ：レシマト・ポアレイ・イスラエル（「イスラエル労働者リスト」）の頭文字をとった略称。一九六五年にベングリオンがマパイから離脱した際に創設した新党。一九六八年にそのメンバーのほとんどはイスラエル労働党に合流したが、ベングリオンら少数派は「国家リスト」として党外に残り、やがてリクードに吸収された。→ベングリオン、マパイ

リクード：ヘブライ語で「統一」。一九七三年にメナヘム・ベギン率いるヘルートを中核として成立したイスラエルの右派政党。ジャボティンスキーの修正主義シオニズムを理論的土台とし、労働党に対抗して対アラブ強硬論を唱える。→修正主義運動、ベギン、ヘルート

レヒ（シュテルン団）：ロハメイ・ヘルート・イスラエル（「イスラエル自由戦士」）の頭文字をとった略称。修正主義運動の地下軍事組織で、一九四〇年にイルグンから独立。創始者アヴラハム・シュテルンの名をとって「シュテルン団」とも呼ばれ、イルグンと対抗しながら一九四〇年代にイギリスとアラブ人に対するテロを行う。後の首相シャミルを指導者の一人とし、建国後「戦士党」を結成したが短命に終わる。イルグンよりも更に急進的でイスラエルの極右の源流の一つとなった。→修正主義運動、イルグン、シャミル

労働（シオニズム）運動：社会主義シオニズム（労働シオニズム）を奉じたシオニズム左派の運動。後の労働党などイスラエル左派につながる。実践的シオニズムの流れをくみ、社会主義的理念を背景に、入植という実践的行為や農業などの肉体労働を通じてパレスチナの地との有機的結び付きを獲得しようとした。「労働の征服」運動で労働現場からアラブ人労働者を排除し、アラブ人との社会経済的な分離をめざす一方、階級団結によるアラブ人との和解を主張するという矛盾した路線をとり、イギリス委任統治下のパレスチナでアラブ人との共存を否定する修正主義運動と激しく対立したが、一九三〇年代には社会主義を実質的に放棄し、アラブ人住民の移送・追放を唱えて強硬論に傾く。世界シオニズム運動の主導的勢力となり、ベングリオン率いるマパイ（一九六八年からイスラエル労働党）を中心にイスラエル建国を導いた。→社会主義シオニズム、実践的シオニズム、マパイ

労働党→マパイ

ワイツマン、ハイム：一八七四～一九五二。世界シオニズム運動の指導者、イスラエル初代大統領（一九四九～一九五二）。イギリスにバルフォア宣言を出させることに成功し、長期にわたって世界シオニスト機構会長（一九二〇～一九三一、一九三五～一九四六）を務めるなど重要な存在であった。

シオニズムとアラブ

ジャボティンスキーとイスラエル右派（うは）　一八八〇～二〇〇五年（ねん）

二〇〇八年七月一〇日第一刷発行

著者　森（もり）まり子（こ）

©Mariko Mori 2008

発行者　野間佐和子
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽二丁目一二―二一　郵便番号一一二―八〇〇一
電話（編集部）〇三―三九四五―四九六三　（販売部）〇三―五三九五―五八一七
（業務部）〇三―五三九五―三六一五
装幀者　山岸義明　本文データ制作　講談社プリプレス管理部
印刷所　信毎書籍印刷株式会社　製本所　大口製本印刷株式会社
定価はカバーに表示してあります。

落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務部あてにお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。なお、この本についてのお問い合わせは、学芸局選書出版部あてにお願いいたします。
Ⓡ〈日本複写権センター委託出版物〉本書の無断複写（コピー）は著作権法上での例外を除き、禁じられています。

ISBN978-4-06-258418-0　Printed in Japan
N.D.C.227.9　269p　19cm

講談社選書メチエ　刊行の辞

書物からまったく離れて生きるのはむずかしいことです。百年ばかり昔、アンドレ・ジッドは自分にむかって「すべての書物を捨てるべし」と命じながら、パリからアフリカへ旅立ちました。旅の荷は軽くなかったようです。ひそかに書物をたずさえていたからでした。ジッドのように意地を張らず、書物とともに世界を旅して、いらなくなったら捨てていけばいいのではないでしょうか。

現代は、星の数ほどにも本の書き手が見あたります。読み手と書き手がこれほど近づきあっている時代はありません。きのうの読者が、一夜あければ著者となって、あらたな読者にめぐりあう。その読者のなかから、またあらたな著者が生まれるのです。この循環の過程で読書の質も変わっていきます。人は書き手になることで熟練の読み手になるものです。

選書メチエはこのような時代にふさわしい書物の刊行をめざしています。

フランス語でメチエは、経験によって身につく技術のことをいいます。道具を駆使しておこなう仕事のことでもあります。また、生活と直接に結びついた専門的な技能を指すこともあります。

いま地球の環境はますます複雑な変化を見せ、予測困難な状況が刻々あらわれています。

そのなかで、読者それぞれの「メチエ」を活かす一助として、本選書が役立つことを願っています。

一九九四年二月

野間佐和子

森　まり子（もり・まりこ）

一九七〇年、東京都生まれ。
東京大学教養学部卒業。同大学大学院総合文化研究科博士課程修了（学術博士）。
オックスフォード大学セント・アントニーズ・カレッジ留学、
ハーバード大学中東研究所博士研究員・所属研究員を経て、現在は東京大学非常勤講師。専門は中東近現代史。
中東とヨーロッパ、アラブとイスラエルの両方を視野に収める歴史学の開拓を試みている。
著書に『社会主義シオニズムとアラブ問題』（岩波書店）、論文に「モシェー・シャレット――パレスチナ問題とアラブ・イスラエル紛争をめぐるイスラエル穏健派外交の軌跡1929―1956」（講談社RATIO 2）などがある。

ISBN978-4-06-258418-0
C0322 ¥1600E (0)

9784062584180

1920322016000

定価：本体1600円(税別)

「(アラブ人との)合意につながる唯一の道は
『鉄の壁を建てる』ことであり、それはイスラエルの地で
はいかなる状況下でもアラブ人の圧力に屈しない力が
なければならないことを意味する」(一九二三年の論文「鉄の壁」より)
二〇〇二年に着工、今なお未完成のヨルダン川西岸の分離壁。
その理論的基盤となる思想を唱えたのが、リクードのイデオロギー、
修正主義シオニズムの鼻祖ジャボティンスキーである。
紆余曲折を経て先鋭化されていった彼の民族論は、
イスラエルの対アラブ強硬論を読み解く重要な鍵となる。
民族と国家との関係はどうあるべきか?
この紛争に未来はあるのか?
混迷の続くパレスチナ問題の核心と本質に迫る意欲作。

KODANSHA SENSHO MÉTIER

医学情報センター
10225012 5
横浜市立大学